

言いたくないことば

2022.5.17

まず「なになににきなさい」ということばをやめることです。「姿勢をよくきなさい」「もっとよく考えなさい」「勉強きなさい」「きれいに書きなさい」などと、教師がこうなったらいいと願っていることを、「なさい」ということばをつけて子どもに言う、これは専門職の教師としては、たいへん、みっともない気がします。

その、「なになににきなさい」というのは、だれでも、みんな、言えることばです。教師でない人でもだれでも言えます。「なさい」「なさい」は、子どもの周りに満ちています。ですから、そのことを子どもに自然にさせるように指導することを仕事にしている人、つまり教師が言うことばとしては、たいへん、らしくないと思うのです。

「なさい」と言いたいことを、そう安易に言わないで、自然に子どもにさせてしまう人、そういう人が教育の専門家らしい人だと思います。漢字なら漢字を一生忘れないように、一生使っていくように身に付けさせるのが、教師の仕事。子どもが忘れたということは、それほど子どもの心に深く刻むことが出来なかったということでしょう。忘れてはいけないことは、忘れられないようにする、たいへんなことですが、専門職の教師としての心構え・覚悟は、そこに置かなければと思います。

これは、大村はま先生の『日本の教師に伝えたいこと』に載っているものである。もうだいぶ昔のことになるが、大村はま先生の本を読んで、脳天を打ち抜かれたような衝撃を受けたことがある。まわりに誰もいないのに、赤面したことも覚えている。それほど、大村はま先生の言葉は、まだ若かった私に突き刺さった。

それ以来、教師としての私は、AさせたいときにAとは言わないようにしてきた。Aさせたいときに、あえてBというようにしてきた。このBを考えるのが、大村はま先生のいう、教育の専門家である教師の仕事である。

授業中に、発表の声が小さい子どもに対して、「声が小さいから、もう少し大きな声で、聞こえるように」などという先生がいる。一方、発表する子どもから一番遠い場所に移動して「先生に聞かせて」という先生がいる。

何事も訓練、鍛錬である。毎回、Bを考えていると、意外とできるようになるものである。今では、Bを考えるのが当たり前になった。当たり前のことを言わないようにする訓練である。このような訓練は、誰かに言われてやるものではない。自分に必要なことだから、自分のためにやるのである。まだまだ、中学校には「～なさい」という言葉が多いように思う。大村はま先生に言わせれば、みっともないとなる。少しでも多くの先生方が、「言いたくないことば」を認識してくれればと思う。